４．みんなでつくるくらし
ー自分も何かしよう

（１）考えてみよう！　山地と平野のとくちょう

揖斐川流域では、最も標高の高い根尾村の能郷白山（標高 1,617m）から桑名市で揖斐川が海へ流れ込む河口まで、約 1,600m の高低差があります。そして、地域の特性に応じながら色々なくらしが営まれています。

①気候と動植物、そして人々のくらし

標高が 100m上がる毎に気温が約 0.6℃下がることはよく知られています。そうした気温の違いは、その場所に生息する動植物の種類だけではなく、人々の暮らし方にも影響します。動植物には、寒い気候に耐えられる種類とそうでない種類があります。

人々の暮らしの面では、例えば気温や積雪量の違いにより、平野と山地で家の建て方も異なっていたりします。降雪量の多い山地では、屋根に雪が積もりにくい合掌造りにしていたり、濃尾平野では、水害に備えて敷地を高くするほか、水屋を築いたりします。このように、建築様式をはじめ、生活の中で使用する道具などにもその土地の気候に応じた工夫が施されています。

合掌造りの住居

水屋の住居（平田町教育委員会提供）

気候が違うことで生息する植物も異なるということは、すなわち育てることができる農作物の種類も違うといえます。例えば、地域によっては谷や川の水が冷たく、米をつくるのが不向きな場合もありました。

子どもたちに、そうした動植物や暮らしの違いを拾い出してもらうのも

良いでしょう。また、近年では山地と平野で使用する道具や、生活の仕方など地域間の差が小さくなり、換言すれば地域の個性が失われたとも言えますが、そうした時代の移り変わりを調べるのも良いでしょう。

農林産物や建物の他にも、山地と平野では違った暮らし方がされていました。建設技術や移動手段が発達した現在においては、以前とは異なる「山地と平野の違い」が出てきました。道路網が発達したことによって、かつては容易に近づけなかった奥地の山などへ簡単に行くことが可能になり、山地がレジャー面で多く利用されるようになりました。また、平野では市街化が進んだことにより、自然環境が失われてきている所もあります。それに比べて、山地は依然として貴重な自然環境を残していると言えます。

②水量への影響

標高の差があることで、降水量や河川の流量に影響が出てきます。標高が増して気圧と気温が下がると、空気が含み得る水蒸気量が小さくなり、空気は相対的に湿ります。すると、霧や雲が増えて降水量（降雨や降雪等）も増えることになり、川の流量を増やすことにもつながります。それが、平野を潤すことになるのです（もちろん、梅雨や台風の存在を忘れてはなりません）。

山地に降った雨水は、やがて低い方に向かって流れます。その形態が河川であり、より多くの動植物や人々に潤いを与えてくれます。「日本の川は滝のようである。」とよく言われますが、標高の高い山地が上流域にあることで、平野は川の豊潤な恩恵を受け取ることができると言えるかも知れません。

（２）考えてみよう！　どんなことができるかな？

近年、地方自治の考え方が広まりつつある中で、自分たちの暮らす地域がどのように発展するのが望ましいのかを考えたり、本編での投げかけのように、自分の地域の好きな点を自ら守っていこうとしたりすることは、とても大切なことです。

「みんなが笑顔で暮らせる地域」とか「みんなが元気でいられる地域」といった抽象的なことでも良いので、暮らしの理想、経済的なこと、自然環境面・生活環境面などのことや、交通機関や福祉機関、遊技場など具体的施設のことなど地域の未来像を、子どもたちに描いてもらいましょう。

そして、それに関して自分たちが具体的にできることを考えてもらうと良いでしょう。例えば、笑顔で暮らすためには娯楽施設があれば良いというわけではなく、犯罪を減らすことも必要でしょう。元気な地域にするにはスポーツ施設をつくるだけではなく、「毎日元気に自分からあいさつする」といった誰にでもできてしかも根本的に大切なこともあるでしょう。施設としてあると良いものだけではなく、自分の行動としてどのようなことができるのかを子どもに考えてもらうと良いでしょう。

（３）流域とは？

降った雨や溶けた雪などは、低い方へ流れて集まっていきます。その過程で何本もの小さな渓流ができ、さらにそれらが合流し、やがて大きな河川になりますが、このように降水等が集まる範囲を「流域」と呼びます。

流域に含まれる地域は広く、例えば揖斐川流域には、岐阜県の揖斐郡、不破郡、本巣郡、安八郡、海津郡、養老郡、大垣市、さらには三重県の桑名郡、桑名市などが含まれます（資料編第１章（１）揖斐川流域の概要も参照）。

揖斐川・牧田川合流点から山地方向を望む（写真中央は大垣市内）